



湯浅和夫の

物流コンサル道場

《第55回》

湯浅コンサルティング

代表取締役社長

湯浅和夫

Logistics テイクス編・第14回

メーカーの担当者を連れて 物流部長が事務所を訪ねてきた

まだ十一月初めだというのに、やけに寒さが厳しいある日、いま大先生がコンサルをしている問屋の物流部長が、取引先であるメーカーの物流センター長を連れて大先生事務所にやってきた。

問屋で補充システムを構築する過程で、そのメーカーの納期が不安定なことが問題となり、物流部長は解決のため交渉に出かけた。ところが、逆にそのメーカーのセンター長に相談を持ちかけられてしまい、「それなら先生を紹介しましょう」という話に発展したようだ。

物流部長は大先生事務所に「もしかしたら先生のお客さんになるかもしれません。こんど連れて行きますから。やー、先生事務所の営業マンってどこですかね、私は」などと調子のいい電話を掛けてきたが、応対に出た女史に「先生にはそんなことを口が裂けてもおっしゃってはいけませんよ」と釘を刺された。「はい、わかってます。絶対に言いませんので日程調整をお願いします」というや

り取りを経て、今日の訪問が実現した。

弟子たちは外出していて、今日の応対者は大先生一人である。大先生と向かい合い、センター長はかなり緊張しているようだ。物流部長もいつもと違った状況に緊張を隠せない。

「それで、今日は何？」

初対面のセンター長の名刺を見ながら、大先生が物流部長に聞いた。突然、用件に切り込まれて、物流部長は慌てた。

「はあ、えーとですね、こちらのセンター長が在庫に困っております……。えー、相談を受けたものですから、私ではなんですから、先生にご相談したらということになりました。はい、それで伺いました」

「聞くところによると、すでにあなたは在庫管理の達人の域にあるようだから、十分対応が可能なんじゃないの」

「また、そんな。誰がそんなことを言っているんですか」

「弟子たちだよ」

「へー、そうですか。先生方が。へー」

《前回までのあらすじ》

本連載の主人公である“大先生”は、ロジスティクス分野のクリスマコンサルタントだ。“美人弟子”と“体力弟子”とともにクライアントを指導している。現在は旧知の間屋から依頼されたロジスティクス導入コンサルを推進中だ。メーカーへの発注方法や発注量など在庫管理のルール作りにメドが立った問屋は補充システムの構築に乗り出した。これを受けて、プロジェクトのリーダー的存在である問屋の物流部長はメーカー行脚をスタートした。



Illustration©ELPH-Kanda Kadan

物流部長はなぜか嬉しそうだ。それを見て、大先生が呆れた顔をする。

「妙な人だ。それにしても、よく、こんな妙な人に相談したね」

大先生に問われて、センター長が苦笑しながら、緊張気味に答える。

「はい、部長さんにはご迷惑をお掛けしていますので、私どものセンターの実情を隠さずお話ししまして、見ていただきました。そしたら、部長さんの会社でいま進めておられる『理に適った物流センター』のお話をお聞きしまして。大変感心いたしました」

センター長が話している途中から、物流部長がしきりに自分の顔の前で手を振っている。それを見て、センター長が話をやめた。

「いや、それは先生の受け売りですから……」

言い訳する物流部長に大先生が聞いた。

「理に適った物流センター？ それは何だったわけ？」

かまわれているかもしれないと思いながら、それでも物流部長は素直に答えた。

「はい。市場が必要とする在庫しか置かない、意味のない物流サービスはやらない、センター内作業から徹底して無駄を省くという三要素をベースとした物流センターのことです。いま先生からご指導いただいている最中です」

「そういう物流センターに興味を持ったってわけだ？」

大先生の問い掛けにセンター長が大きく頷いて、話を続ける。

「はい。私どもには本社に物流部がありまして、その部長が、これからの当社の物流をどうすればいいのか、どこに切り口を見出せばいいのか悩んでおりました。そこで、理に適った物流センターの話をしましたら、『物流センターを切り口にするのはいい。それならできそうだ』と大変興味を持ったようです。本当は今日、一緒に来たいと言っていたんですが、前から入っていた用事がどうしても外せなくて、残念がっていました。先生にくれぐれもよろしくお伝えしてくれと言われてきました」

センター長が一息つくと、物流部長が口を挟んできた。

「本当は、先生にお会いするのがこわいので、まずセンター長に様子を見てこいということなんじゃないの?」

「また余計なことを。おれがこわいわけないだろう。もともと、おれはやさしい。コンサルでは教育しているだけさ」

大先生と物流部長のやりとりを聞いて、センター長が申し訳なさそうな口調で間に入った。

「あー、こわいとかじゃなくて、ほんとに用事があったんです」

「在庫がセンターをだめにしている」 物流部長が楽しそうに話す

センター長は、根っから真面目な性格のようだ。大先生が苦笑しながら、先を促す。

「いいから。彼の言うことはいちいち気にしないでいい。ところで、在庫が問題だとか言っている

だけど、まずは在庫にメスを入れたいわけ?」

センター長が「はい」と言って説明しようとするのを物流部長が遮った。

「それはもう、在庫は多いです。在庫が物流センターをだめにしている感じですよ。先生が見たら『ここは物置か』って言いますよ、きつと」

物流部長の言葉に大先生は何も反応しない。まづいという顔で物流部長が続ける。

「在庫が、通路はもちろん隙間があればどこにでも置かれているって感じでした。出荷場所にも在庫が置かれていて、出荷の邪魔をしてました。倉庫の外にトラックが何台も止まっています、なんか物流センターに向かうトラックらしいですけど、出荷場所から結構な距離をフォークリフトが走って積み込みをしました。あれは、作業効率悪いですわ。テナントを張って、そこを仮の積み込み場所にする、いつの間にか在庫置き場になっているんだそうです」

そこで、物流部長は一息ついた。それを待っていたかのように大先生が口を挟んだ。

「そんな批判的な物言いができる立場にはないんじゃないの、自分の会社のセンターと似たり寄ったりだろ」

「はあ、たしかに、どっかで見た光景だなとも思いました。すみません」

物流部長の言葉にさすがの大先生も思わず笑ってしまった。センター長も笑っている。物流部長がセンター長に向かって「すみません」を連発している。大先生が確認するように聞いた。

「工場の外にも倉庫を借りている?」

「はい、二カ所ほど借りています。倉庫の借り賃や横持ちのトラック代など明らかに無駄としかいいようのないコストが発生しています」

センター長が正直に答える。

「物流側で在庫の補充をしたい」 センター長が改革の構想を披露した

「なんか、データを持ってきたんじゃないかなかったわけ、在庫の？」

突然、物流部長がセンター長に確認した。

「はあ、でも今日の段階ではお役に立たないと思うんですが……」

そう言って、センター長がカバンから在庫表のよなものの束を取り出した。

「入出庫と在庫残の動きを一覧表示したものです」
在庫アイテム別に一枚ずつになっていて、日付と入庫量、出庫量、在庫残が並んでいるだけの簡単なものだ。物流部長がしげしげと眺めている。突然、感心し始めた。

「すごいな。出荷に合わせて入庫されている。出荷量が大きいから、事前に情報をつかんで、その出荷に合わせて在庫を手配したんですね。大したものだ」

しきりに感心する物流部長に大先生がぼそっとつぶやいた。

「たしかに、出荷に合わせて手配したのなら大したもんだけど、その逆かもしれないぞ」

大先生の言葉にセンター長が即座に反応した。

「はい、おっしゃるとおりです。逆です。大量に入荷したので、溜まっていた受注残を出荷しただ

けです」

センター長の説明に物流部長が何か思い出したように、大きく頷いている。

「そう言えば、おたくは結構欠品が目立っていたな。そうそう、うちでも、あそこは欠品するかもしれないから多めに頼んでおいたほうがいいなんて言っていたことがある。困るんだよな、それでは」

「申し訳ありません。ご迷惑をお掛けしています……」

物流部長に頭を下げるセンター長に大先生が確認する。

「それは、全社欠品？」

「いえ、うちには九カ所のセンターがあるんですが、どこかのセンターには余った在庫があるんです。在庫が偏在しているんです。それに困っています。補充担当者が営業サイドの人間なものですから」

「各センターがそれぞれ工場に発注している？」

大先生の問い掛けに、ちよつと恥ずかしそうな顔でセンター長が頷く。

「うちは変則的なのかも知れませんが、主管支店ごとにセンターを持っていて、主管支店の発注担当者が営業の情報や要望を加味して在庫の補充をしています。補充システムがあつて、発注点なども設定してあるようですが、営業の予算に合わせて在庫を確保したり、売れそうだと思うものは多めに取ったりしています。それらが在庫として溜まってしまっています」

「別に変則というわけでもないよ。どっかの問屋さんも同じさ」

「はい、たしかに、うちも同じことやっています」
大先生の皮肉に物流部長が素直に応じる。センター長が苦笑しながら、続ける。

「そこで、在庫補充を物流側でやれないかというのが部長の考えです。幸か不幸か、うちの発注担当者はそんな仕事やりたくないと思っていて、『そっちでやるならやってもいいよ』なんて言っていますので、まず私のセンターで先行して成功事例を作って、それから全センターにそのやり方を展開したいと部長は考えています」

「一点突破、全面展開ですな。かつこいい」
なぜか物流部長が嬉しそうな顔をする。センター長は戸惑った表情だ。

「先生は頼まれると断れない性格」 物流部長の指摘に呆れ顔の大先生

突然、センター長が座り直して、意を決したように話し出した。

「ただ、物流側で補充をやるといっても、実際どんな仕組みでやればいいのかわかりません。そこで、この補充システムの導入のご支援をいただけないかということで、今日お願いにあがったわけです」

突然お願いされて、今度は大先生が戸惑った表情を見せる。物流部長がささずセンター長に妙な助け舟を出す。

「私がお願ひするものなんですが、困っているようですので、なんとかお願ひできないでしょうか。先生は頼まれると断れない性格ですよね」

「また、余計なことを。ほんと口数が多いな、あなた。まあ、おたくはあんたがしっかりしているから、もう手間はかからないな。それでは、こっこの会社もやってみるか……」

大先生の言葉を聞くなり、物流部長が身を乗り出した。

「また何てことをおっしゃるんですか。私のところも、まだまだ手間がかかりますよ。手間だからです。ですから、私どものご指導の合間を縫ってやっていたかどうかということをお願いします……はい」

パーティーシヨンの向こうで女史が笑いを堪えている様子が伝わってくる。大先生は呆れた顔で何も言わない。最近では、大先生も物流部長にはかなわない様子。これからも物流部長の一人舞台が続きそうだ。

(本連載はフィクションです)



PROFILE

ゆあさ・かずお 一九七一年早稲田大学大学院修士課程修了。同年、日通総合研究所入社。同社勤務を経て、二〇〇四年四月に独立。湯浅コンサルティングを設立し社長に就任。著書に「現代物流システム論(共著)」、「物流管理ABCの手順」(かんき出版)、「物流管理ハンドブック」、「物流管理のすべてがわかる本」(以上PHP研究所)ほか多数。湯浅コンサルティング <http://yusaco.co.jp>